

みんなでやるう民放史



盛田和穂(RAB)

題字 中川 順

各局の報告に加えて新年度、業務計画が策定される。

当時の報道制作局は報道部12名、ラジオ制作部とテレビ制作部が各9名、アナウンサー

集団の放送部17名、美術部6名、CM美術部6名、制作技術部10名、制作技術部14名、管理部門

を入れて総勢80名を超える大所帯だった。局長の須藤さんは、巨躯馬車

ウマのようなスマニアとバイタリティの持ち主で、そのずば抜けた行動力と指導力でわれわれ制作集団のトップを走っていた。

あの叱咤激励の声がなつかしい。多聞にもれず日に日にせわしさが増していった。11月は社の定例幹部会で

議の月、その年度の業務の見通しや

秋が深まると社内各部は年末年始を控えて慌ただしい時を迎える。この年、一九六九年(昭和44年)もご多聞にもれず日に日にせわしさが増していった。11月は社の定例幹部会

議の月、その年度の業務の見通しや化についてチラリと述べた。出席者

の反応は複雑で「単発ならともかく、現状でも精一杯なのに枠を拡げて、しかも帶の生出しになると容易ではない……」互いに顔を見合せた。須藤さんの背後には、社設立以来の筋金入り新聞人小沼専務、渋谷常務の顔が見える。後ずさりできる状況ではなさそうだ。

一九六六年4月に開始したカラー放送も、当初はネット番組に限られていたが、二年後県内のカラー受像機が三万台を数えた段階で自社制作番組のカラー化に踏みきつている。カラー中継車の導入、自社制作番組のカラー化、カラー現像機の設置、社はあげてカラー一色に染まりつつあった。

新社屋のカラースタジオや機材の総投資額は、ざっと見ても二億四千万円。当時の地方局としてはかなり思い切った投資だったに違いない。

自社制作の強化、だが……

機材が整備され扱いにも習熟してくれば、次は自社制作の強化拡充に目が向いてゆく。年が明けてからの幹部会議では、ニュース番組の強化について熱のこもつた討議があつたと聞いた。須藤さんの話では、4月開始で、朝の生放送だという。ラジオ時代からの調査でも、県民

のR A Bに対する期待度は各分野でN H Kを凌駕していた。

テレビでは朝9時を過ぎるとほとんどの時間帯で圧倒的な優位に立っているのに、朝7時から9時までは魔の時間だった。朝を強くしたい。

それは、青森放送全員の思いだった。なにをぶつけたら勝てるのか――県民の期待に応える鍵は掌中にあつた。だが、現場は別だ。4月では余りにも準備期間が短い。

最大のネックは人だ。須藤さんは私が必要な数を指を折って見せた。

「P D、F D、カメラ、カメラ、カムコン、音声、記者、美術、写植……それに、メインキャスターとアナウンサー。少なくみても13名。それも、毎日で早朝。5時出社なら午後1時で勤務明け。毎日ローテーションを組んでのやり繰りは大変です」

「ニュースはどうします。前の晩に編集しておかないと間に合いません。現像も本数が増え、美術も写植テロップ制作も人手不足は免れません」

「大型の制作番組が入ったとき、これまでのよう前日仕込みとはいかなくなります」

い社で、レギュラーの他に、社としまった。

地域密着こそ放送局の命

て、地域密着の行事やイベントに積極的に参加実施していた。それが励みでもあり活力の源でもあった。

新番組も、趣旨には大賛成だが、

ネックが多過ぎる。不安だ。

4月は人事異動の月だが2月末に内示する。業務の引き継ぎや異動の

心構えをさせるわけだが、その内示

で驚いた。制作部長のポストに私の

名前がある。部員は14名、ラジオと

テレビの制作を一緒にした制作部は

部長が一人になつただけで、部員数

はそのままだ。ほかに美術部とC M

部が合体して新名称は造形部。この

名称は社内公募で決めたのだが、

社員に参加意識を持たせ、変革の下

地を感じさせるには的を得たアイデ

イアであつた。造形部と一口にいつ

ても、美術やC M制作、制作セクシ

ヨンのカメラマンや現像までを含む

多機能集団で、余談だが、新人佐藤

元伸こと、かの、いなかっぺいも、

ここへしごかれた。

この組織改革は人手不足解消の苦

番組の主体はいうまでもなく地域密着のニュースだ。ニュースでどれだけのスペースが埋められるか。ニュースは10分枠でも天気予報があるので実質6分前後だ。5分だと3分あるかなしか、3項目か4項目しか伝えられない。定時枠は昼、夕方、夜とあるが、一本にまとめるときで一味違つたものに仕上がるのではないか。そんな報道と制作部との討議の中で大きく浮上したのが東京支社が取材する県外からのニュース素材の存在だつた。

東京の報道部は4名。取材先は、大阪、名古屋、仙台、時には札幌にまで及び県関連のニュースを追つてゐる。特に、県出身者の活躍や消息にスポットをあてた映像には新鮮な県外の匂いがあり、視聴者の反応もよかつた。この県外版の充実は番組の目玉になる。ニュースは県内ものと県外ものとの二本柱でゆくことに落ち着いた。

同時に報道部は、県内67市町村のうち56市町村に取材協力員を配置、キメこまかに取材網を張りめぐらせ

た。役場の職員から理髪店、電気屋さんまで、職種も多彩なら送られてくる情報も彩り豊かだった。

二年前、他社に先駆けてすべてのニュース枠カラー化に踏みきつたパオニア精神を生かしたかった。

一分でも早く、時間枠の設定

新番組は午前7時から8時までの一時間というのが須藤局長が示した大枠だ。当時の朝の編成は、NTV発の『朝7時のニュース』『スポーツニュース』『おはよう!こどもシヨー』の後、ようやく8時になつて自社制作の『東奥日報ニュース』の5分だった。その上、番組カラー化の過渡期だったため『おはよう!こどもシヨー』はモノクロだった。裏のNHKはニュース、天気予報の後ローカルの『青森県のみなさんへ』『スタジオ102』と続く。視聴率は45%対26%だったのが、前年の秋には40%対19%にまで落ち込んでいた。自社制作でもこれ以上悪くはないまい、そう思うと気が楽になる。

まだラジオ部長の身分でしながら新番組構成の模索が続いた。構成案に対し幹部会議から何度もダメ出しがでたことか。基本フォーマットが決まった。

▽オープニング

▽朝7時のニュース(NTV発)

▽スポーツニュース(NTV発)

▽RAB県外ニュース

▽天気予報

▽ニュースを追つて

▽ニュース解説

▽けさの話題

▽天気予報(概況を含む)

▽ニュース解説

▽けさの話題

▽天気予報(概況を含む)

持てる力を結集して

キヤスターには入社以来報道一筋の吉備報道部長、アナウンサーにはワイルド生番組で度胸を培った小島アナの起用が決定した。

3月の半ばまで、スタッフの起用であれこれ思案の毎日が続く。



小島アナ(左)、吉備キャスター(右)
電話は視聴者と番組を結ぶホットライン

テレビはラジオと違い総合力がものをいう。特に長丁場の番組とともに

ればチーム・ワークが欠かせない。

報道部はこれまで定時ニュースの取材、送出にウエイトがおかれて、スタジオでの制作にはあまり縁がなかった。ここ一番では硬派の大型番組も手掛けるが、こうした日常処理

をともなうワイルド番組は苦手だ。そこで、報道部の担当はニュースの編集、原稿作成、素材の持ち込みセッティングまでとした。

アナとキヤスターは本番前に下読み。映像の内容まで確認する時間も

31. 4/7 (火) 14. 21	4/1. 8 (水) 15. 22	4/2. 9 (木) 16. 23	4/3. 10 (金) 17. 24
<p>テストパターン コンサート</p> <p>あさ7時のニュース</p> <p>スポーツニュース (佐藤哲機)</p> <p>おはよう! こどもショー</p> <p>(各社)</p> <p>東京ニュース</p>	<p>テストパターン コンサート</p> <p>RAB ニュースレーダー</p> <p>あさ7時のニュース スポーツニュース 県外ニュース</p> <p>(各社) シートン動物記</p>	<p>テストパターン コンサート</p> <p>RAB ニュースレーダー</p> <p>あさ7時のニュース スポーツニュース 県外ニュース</p> <p>(各社) シートン動物記</p>	<p>テストパターン コンサート</p> <p>RAB ニュースレーダー</p> <p>あさ7時のニュース スポーツニュース 県外ニュース</p> <p>(各社) シートン動物記</p>

なく本番突入ということになる。三ヶ月後、番組が60分から80分に拡大された時点で女子アナを起用、吉備キャスターは報道部長との二足のわらじ。前夜の編集の指示やプレビュード流れは頭に入っていたが、小島アナはほとんどぶつつけ本番でカメラ脇に無愛想に立っているエア・モニにちらちら目をやりながら、トクリもせず読み通した。CM直後にはインターネットや企画コーナーが待っていた。たいした男だった。ディレクターには要となる三人を選んで、下に若手のサブを配置した。

週6本を、一人が2本担当することになる。技術部も新設の造形部も、朝用のスタッフをローテーションで確保できるメドがつき、全体の整合性は私が受け持つことになった。

さらに大事な問題があつた。膨大な制作費をどうやって獲得するか。予算の分捕り合戦が始まる。社内の知己同士でも半ば冗談に“仁義なき戦い”と自嘲する3月であつた。

ニュース部分は時間が大幅に増えるので、取材費やフィルム代の増額は可能だろう。フィルムが増えれば現像費用も上がるが、これも、説得の範囲だ。

制作部からは、出演料や交通費、

出演者の宿泊費などを概算で計上、交渉に臨んだ。渋い面の経理には、経費はかさむが、カットされる番組のネット費やマイクロ回線料が浮くではないかと力説したり、設定したPT枠の販売収支計画をもとに膝詰め談判、ようやくメドをつけた。

社史には、月六百万円の制作費とあつたがニュース取材を含む総額の数字なのだろう。それにしても奮発したものだ。

かくて、全国で初の、早朝、全面カラーライ生放送のニュースワイド番組スタートの下地が整つた。

いよいよスタート

—白紙のタイムテーブル

放送開始は4月1日と決定した。

一九七〇年。大阪万博の年である。週半ばの水曜日。これも型破りだ。

三日前の日曜日には、放送スタートの時刻に合わせて全員が出社。本番さながらのリハーサルで早朝放送の緊迫感を肌で感じとつた。

別表のタイムテーブルはスタートの週のものだが、二週間前出稿のため校正が間に合わず、決まつていた『県外ニュース』以外は白いまま、試行錯誤の往時がしのばれる。

4月1日。放送開始。この日を期して仕込んだニュースや企画もので

1971年1月1日の進行表 上の欄外にホノルルTEI・パリTEI とある

鮮度のいいミニユーニットがそろつた。だがなんたる不運か。前日の3月31日、日航機よど号ハイジャック事件が発生、視聴者の関心はそれに釘付けになつてしまつた。オープニングではやっぱやとこのニュースに触れ、「くわしいことはこの後の『七時のニュース』で」と逃げた。しかし地元のキヤスターが放送開始直後に一言触れることができたのは以て瞑すべし。説得力、親近感に満ちた第一声ではあつた。幸か不幸か、犯人の中に八戸出身の爆弾男・梅内がいるらしいと共同通信が配信。緊迫感のある、生ながらではの進行になつた。ここで企画不

夕でははなから勝負はみえている。苦労して仕込んだ報道の担当は砂を噛む思いだつたに違ひない。

4月6日月曜日には早くも生中継を試みている。この日から始まる春の交通安全キャンペーン行事、県警白バイ隊スタートの模様を県庁前から中継。人の遣り繰りに四苦八苦なのに、放送開始からわずか一週間目の中継車出動だ。呆れるほどの挑戦魂といわざるを得ない。

放送開始二ヶ月後の6月15日には番組を80分に拡大。これを機に女子アナを登用、天気予報、ニュースのやわネタのほかに生コマまでこなすという忙しさになつた。

この手だけでも生の人中は7回

鮮度のいいメニュー運か。前日の3月31日、日航機号ハイジヤック事件が発生、視聴者の関心はそれに釘付けになってしまった。オープニングではやっぱやとこのニュースに触れ、「くわしいことはこの後の『七時のニュース』で」と逃げた。しかし、地元のキャスターが放送開始直後に一言触れることができたのは以て瞑が放送開始直後に数え、元旦にはなんとモノクロ中継されし。説得力、親近感に満ちた第1声ではあつた。

幸か不幸か、犯人の中に八戸出身の爆弾男・梅内がいるらしいと共同通信が配信。緊迫感のある、生なら

タでははなから勝負はみえている。苦労して仕込んだ報道の担当は砂を噛む思いだつたに違いない。

4月6日月曜日には早くも生中継を試みてる。この日から始まる春の交通安全キャンペーン行事、県警白バイ隊スタートの模様を県庁前から中継。人の遣り繰りに四苦八苦なのに、放送開始からわずか一週間目の中継車出動だ。呆れるほどの挑戦魂といわざるを得ない。

放送開始二ヶ月後の6月15日には番組を80分に拡大。これを機に女子アナを登用、天気予報、ニュースのやわネタのほかに生コマまでこなすという忙しさになつた。

この年だけでも生の入中は7回を初日の出の挙げる八戸市館鼻の岸壁車まで動員して、青森県で一番早くと青森市内の神社の初詣を入れている。衛星が常識の現在ならざ知らず、当時の中継は多段中継で、マイクロひとつ通すにも人員勘定の必要な時代だ。よくやつたものである。

当時の進行表をみると、パリ在住の県出身の声楽家野呂妙子さんや、ホノルルの県人にまで電話インタビューや試みている。

鮮度のいいミニユーニットがそろつた。だがなんたる不運か。前日の3月31日、日航機よど号ハイジャック事件が発生、視聴者の関心はそれに釘付けになってしまった。オープニングではやっぱやとこのニュースに触れ、「くわしいことはこの後の『七時のニュース』で」と逃げた。しかし地元のキヤスターが放送開始直後に一言触れることができたのは以て瞑すべし。説得力、親近感に満ちた第一声ではあった。

苦労して仕込んだ報道の担当は砂を
嘔む思いだつたに違ひない。

4月6日月曜日には早くも生中継
を試みている。この日から始まる春
の交通安全キャンペーン行事、県警
白バイ隊スタートの模様を県庁前か
ら中継。人の遣り繰りに四苦八苦な
のに、放送開始からわずか一週間目
の中継車出動だ。呆れるほどの挑戦
魂といわざるを得ない。

放送開始二ヶ月後の6月15日には
番組を80分に拡大。これを機に女子
アナを登用、天気予報、ニュースの
やわネタのほかに生コマまでこなす
という忙しさになつた。

この年だけでも生の入中は7回を
数え、元旦にはなんとモノクロ中継
車まで動員して、青森県で一番早く
初日の出の押める八戸市館鼻の岸壁
と青森市内の神社の初詣を入れてい
る。衛星が常識の現在ならいざ知ら
ず、当時の中継は多段中継で、マイ
クロひとつ通すにも人員勘定の必要
な時代だ。よくやつたものである。

当時の進行表をみると、パリ在住
の県出身の声楽家野呂妙子さんや、
ホノルルの県人まで電話インタビ
ューを試みている。

シンプルだったパックのパネルも年明けからは高さ2メートルを超えた大レーダー画面に変わった。制作した上崎君によると、レーダーは巡航船「おくしり」のもの。写真撮影したモノクロフィルムを紙焼きし、美術のベテランに彩色してもらつたものを再度撮影、ネコ(N E C O)という手法で大画面にしたものだと。世界はおろか宇宙にまで広がる迫力満点のパネルで、新しい年の『ニュースレーダー』が始まった。年が改まるといと民放各社からの見学がしきりとなつた。新聞や雑誌社も多かつたが、こちらは視点が違う。出演者を送りだし、一息ついた後でお会いする。同じ質疑応答を何度も繰り返しただろうか。しかし、質問を受けるたびに得ることがあつたのは確かだ。

キヤスターの吉備さんに「なにが印象に」と尋ねた。即座に「鰯ヶ沢町の二人町長事件のときの放送」だつたと言う。鰯ヶ沢は日本海岸の小さな町である。ここで、町の選管が現職候補の当選を取消し、次点の候補を当選と決めて当選証書を交付したため二人町長が出現するという珍事が起こり全国の注目を集めた。二人の町長が登場する当日は現場からの生中継をはじめて構成した。

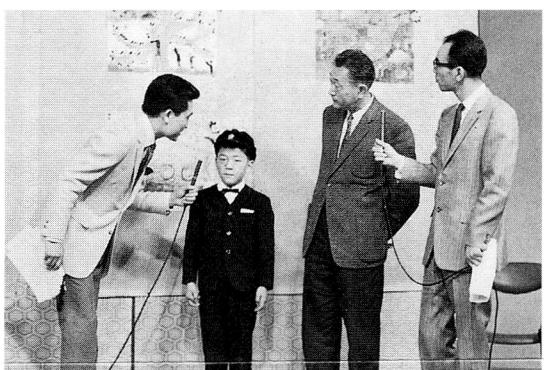
PR大作戦、ついにNHKを抜く

45年10月の視聴状況調査では、水曜日35.3%、木曜日33.2%で、わずかだがNHKを抜いた。この時全社あげて展開したPR大作戦は、今も社内では語り草になつてゐる。ポスター、名刺に貼るシール、出入りの車すべてにステッカー、团扇や大型のブックマッチ、名刺サイズのカレンダー、新聞やローカルタウ

ンブルだつたパックのパネルも年明けからは高さ2メートルを超えた大レーダー画面に変わつた。制作した上崎君によると、レーダーは巡航船「おくしり」のもの。写真撮影したモノクロフィルムを紙焼きし、美術のベテランに彩色してもらつたものを再度撮影、ネコ(N E C O)という手法で大画面にしたものだと。世界はおろか宇宙にまで広がる迫力満点のパネルで、新しい年の『ニュースレーダー』が始まった。

この部分だけNTVに入中。キンタロー大島渚さんは「田舎だからこんなことがあるんだ。それが面白い。あってもいい」。人間臭いという感じの発言だつた。一方の吉備さんは現地をつぶさに取材、混沌とした政争の中で町の人びとが必死に解決の糸口を探つていてそれを実感している。大島さんの「田舎のドタバタ喜劇サ」とでもいいたげな、中央感覚でローカルを見るのは、吉備さんにとっては認識の大きな開きがあつた。双方、モニターを通してのやりとりで、かけあいの呼吸もいまひとつ。硬骨漢の吉備さんにとっての「レーダー」とつても苦い思い出となつた。

番組がスタートした一九七〇年、昭和45年は30年も昔のことだ。今のレーダーの若いスタッフが生まれた頃始まつた番組である。放送時間も朝から夕方に変わつた。新しい世纪を迎えるとしているこれからも、地域に密着した、時に型破りのニュース番組を育てて欲しい。



『けさの話題』東奥美術展入選児童のインタビュー